松本市教育研修センターだより

No.18　令和５年９月29日

教育実践の「根」を深める

９月とは思えないほどの、暑い日が続きましたが、それでも朝夕の涼しさに、確かな秋の訪れを感じる季節となりました。「学びの秋」を迎え、各校では学校行事や授業等の実践を通して、めざす子どもの姿の具現に一歩一歩を進めていただいています。

松本市の教育が目指すのは「子どもが主人公　学都松本のシンカ」をテーマにした教育大綱の理念の具現です。新たな実践を志向するとき、ともすれば、「こういう方法で、こうすればいい」という「形」や、「実践のノウハウ」を求めがちになってしまう私たちですが、それらの大本に「全ての子どもを大切にする」という深い目標やまなざしがなければ、どのような取組も、新たな「形」の押しつけに終わってしまいます。各校で教育実践を深めていくこの時期に、松本市のリーディングスクール・アドバイザーをお務めいただいているお二人の先生にお話を伺う機会を得ました。教育実践の「根」をみつめ、問い直す機会となったこれらの研修の様子を報告いたします。

第２回　研究主任研修会　「相手になることで生まれる教育」

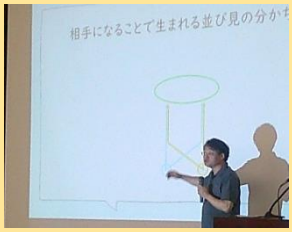
グループ協議の輪に入り、研究主任の声に応える岩川先生

８月 31 日、市内全校の研究主任が集う研究主任研修会を開催しました。前半は、中信教育事務所指導主事 橋爪　祐一 先生より「子どもの視点から掘り下げる授業づくり」をテーマにご講演をいただきました。中学校家庭科の被服領域の単元において、製作過程で母親との思い出を語る生徒の姿をとらえて、単元展開を構想しなおしていった実践例などをもとに、子どもの視点に立って授業づくりをする大切さをご講演いただきました。

後半は、埼玉大学教育学部教授 岩川 直樹 先生より、「相手になることで生まれる教育」をテーマにご講演をいただきました。モノサシをあてがうのではなく、子どもの関心に教師の関心を向けることが相手になることにつながり、そこから子どもの変容が生まれることを事例をもとにご講演いただきました。グループ協議では語りと傾聴の温かい関係性の中、子どもの具体の姿を語りながら、自身の経験を披瀝しあう参加者の姿が見られました。

【参加者の感想から】

・「子どもを中心に据える」「子どもと教師が共に学ぶ」という言葉が改めて印象に残りました。一方通行の関係性では見えるものも見えなくなってしまうということを感じました。それは、授業に限らず、学校生活の全てに言えることだと思いました。



《並び見の分かち合い》について語る岩川先生

・自分の経験を思い出しながら聞いていました。ものさしをあてがうことは、相手になることとは違う。しかし、教師と生徒である以上、評価することはさけられない。でも、教師と生徒の前に人間と人間であり、相手の気持ちに関心を持ち続けていきたいと思いました。「主体的に学習に取り組む態度」について研究に取り組んでいますが、教師のノウハウに偏らないように、「生徒の心」が土台であることを意識していけたらと思います。

市費教員合同研修会　「相手になることが支えるその子どもの自己形成」

上記の研究主任会の翌日９月１日、自立支援教員と特別支援教育支援員、そして教育支援センター指導員の皆さんが参集して「市費教員合同研修会」を開催しました。本研修では、岩川直樹先生より「相手になることが支えるその子どもの自己形成」をテーマにご講演をいただきました。（次ページへ）

（前ページより）子どもにとってたとえ一瞬でも、相手になってもらった経験の意味は、その時その場で終わらない、ということを教えていただきました。

それぞれの参加者にとって、日頃の子どもとのかかわり合いがもつ意味を見つめ直す研修となりました。岩川先生のご講演をお聞きしたり、同じ学校の先生同士で感想を共有したりすることを通して、会場は参加者同士がより親しくなっていくような温かな雰囲気に包まれました。

【参加者の感想から】

・「今ここでその子どもの相手になる関係を生きることが、その後どこかでその子どもが誰かと生きる関係につながる」というお話が印象に残りました。それぞれが成長していく中で大切なことだと思いました。

「みんなの学校」をここに！　木村泰子先生を迎えて（校長・教頭合同研修会）

９月７日（木）、大阪市立大空小学校の初代校長、木村泰子先生を迎え、「校長・教頭合同研修会」を開催しました。この研修会は校長会・教頭会と教育研修センターが連携し共同企画として実施しました。

当日の研修では、まず、全員で映画「みんなの学校」を鑑賞しました。「みんなの学校」は木村先生が校長を務められた大阪市立大空小学校に、１年間テレビ局が密着取材し、制作されたドキュメント映画です。「全ての子どもの学びの保障」を最上位の目標に据え、それを深く共有して、先生たち、子どもたち、保護者・地域の人たちみんなが、「当事者」として学校を創っていく大空小学校の日常の営みが描かれます。「すべての子どもの学び」のために、活き活きと動く校長先生をはじめとする先生方の姿、失敗しながら「やり直し」、成長していく子どもたちの様子がつぶさに描かれ、胸に迫ります。

その後、木村泰子先生が登場。さっきまで映画の中にいらした先生から、直接お話を伺います。

◆「すべての子どもの学びを保障する」という学校の最上位の使命を共有し、いつもそこに立ち戻ること　◆目標実現のさわりになるものは思い切って捨てること　◆まず「行動」すること、「行動」だけが思いを伝えることができること。◆自分の頭で考え、表現することがなにより大切なこと　◆教員の最重要の資質は「人の力を活用できること」…等など、実践から生まれた数えきれないほどのご示唆を、エピソードとともに熱くお話しいただきました。「私たちパブリック（公共）の学校の使命は『全ての子どもの学びを保障する』こと。それが本当にかなうならば『方法』は問題にしません」という言葉が、深く胸に刻まれました。熱い語りに、会場全ての参加者が引き込まれ、あっという間の 90 分のお話しでした。

【参加者の感想から】

・とても感動しました。どんな子どもにも無限の可能性があることを、映画とご講演を通して改めて感じることができました。すべてを受け入れ大きな愛で徹底的に肯定してくださる木村先生が子どもたちが内なる力を安心して出していいことを子どもたちに教えてくださっていました。木村先生の揺るがない姿勢は子どもたちも先生方も大きな安心感・信頼感だと感じました。言い訳をしている、逃げている場合ではない。私たちは未来をつくることに携わっているのだから。明日からいや今からの行動を変えていこうと思いました。

・映画を視聴してから、お話を聞く流れだったことから、木村先生のお話が具体的に映像でイメージできました。本物の実践は、「型」や「方式」、「メソッド」ではなく、どう自分が考えて実践をするのか、根本的なことを考えるきっかけになると改めて気づきました。

・木村先生からは、学校改革の How to という「形」ではなく、管理職が Vision をもって、そして Vision 以上に愛を持って、子どもたちや職員に関わっていくことの大切さを、体じゅうに浴びることができました。

・一人一人の子どもを大切にすることを徹底し、ぶれない木村先生の実践に圧倒されました。子どもを理解しようとするとき、先入観がないか、レッテル張りをしていないか自分に問い返す時間になりました。手段が目的化していないだろうか、取組が形骸化していないだろうか等々、学校経営についても深く考えさせられる有意義な時間でした。

・多様性の時代の中、すべての子どもにとって必要な力はどんな力であるか、そのためには今の学校のシステムでそういった力を付けることができるのか、職員間で話をすることが大切なように思う。風通しのよい職員室づくりのために、まずは先生方との「雑談」を大事にしたい。